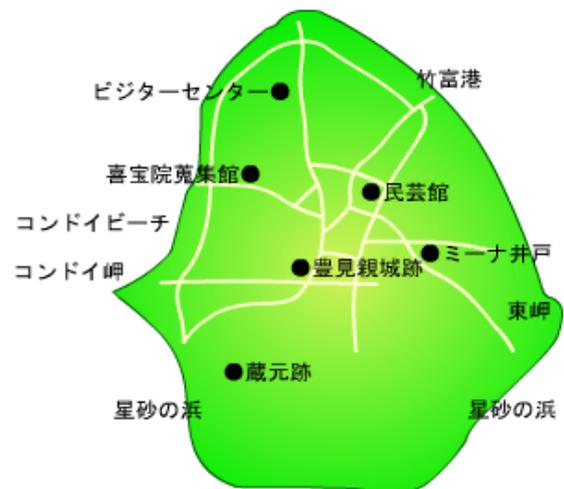




指田 勢郎 竹富島診療所長



離任慰労会



主催； 国際ロータリー第2580地区沖縄分区 ガバナー補佐
主管； 国際ロータリー第2580地区沖縄分区 宜野湾ロータリークラブ



指田 勢郎 竹富島診療所長 離任慰労会 式次第

2007/4/21 (土) pm7:00 ~

司会進行：宮城 富夫

1	開会の辞	離任慰労会実行委員長	比嘉 行健
2	主催者挨拶	国際ロータリ - 第2580地区沖縄分区ガバナー補佐	喜納 兼功
3	ロータリーソング (奉仕の理想) 斉唱	ソングリーダー	アラルコン 朝子
寿	慰労・激励挨拶	パストガバナー補佐	安里 政芳
		パストガバナー補佐	大仲 良一
5	乾杯の発声	国際ロータリ - 第2580地区幹事	岩尾 碩

お食事タイム

6	余興 琉舞	吉田建二
7	余興 琉球芸能	上勢頭 保
8	ロータリアンのフリーメッセージ	木村貴治
9	記念品贈呈	
10	本人挨拶	指田 勢郎
11	閉会の辞	主管宜野湾ロータリークラブ会長 泉 恵得



竹富島集落
(国の重要伝統的建造物群保存地区に指定)

竹富町立竹富島診療所





指田 勢郎 竹富島診療所長

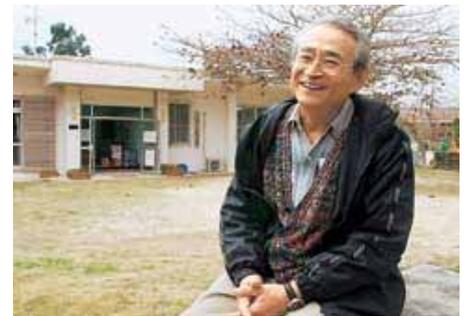
記事特集1/7

< 1 > 残りの人生 無医島のために

被爆の少年 古希の誓い

コバルトブルーの海面に浮かぶ沖縄県・竹富島（竹富町）の町立診療所に、約二千キロ離れた東京都西東京市から医師がやってきた。戦後初めての島の常勤医。外科医の指田勢郎（さしだせいろう）さん（71）である。

島は周囲約九キロ、人口三百人余。診療所には長年、米国占領時代に設けられた医療従事者「医介輔（いかいほ）」がいた。二〇〇二年三月に引退して、“無医島”になっていた。



「島人たちの健康づくりを手伝いたい」と話す指田勢郎さん

豊かな緑と昔ながらの赤瓦が美しい竹富島

「島には医師がいない。誰か紹介してほしい」。ここ数年、竹富島に住むロータリークラブの仲間から懇願され続けた。昨年十月に島を訪れた。出迎えた島民が思いがけないことを言った。

「先生、ここじゃ、死んだらみんな『変死』なんです」
法律上、医師のいない所で死亡すると、「変死」扱いとなる。遺体は船で石垣島に運ばれ、警察医によって検視される。

「ふびんだ」。指田さんは心を揺さぶられた。

*

一九四五年八月六日、広島。中学二年生の時、爆心地から約二・二キロ離れた練兵場で被爆、右半身に大やけどをした。「爆心地で作業していた一年生は全滅。我々二年生は前日、そこにいた」

あれから約六十年。「おれたちの分まで生きろ」という仲間の声を思い出しながら、古希を迎えた。

「彼らを救えなかった分、残りの人生、この島で人の命を救いたい」
島への移住を決めた。今年一月、医院を任せている長男のもとに妻を残して島に来た。

診療所の診察室には机と診察台、薬棚があるだけ。
予算は少なく、看護師も事務員も雇えない。薬剤の管理から食事まですべて一人でこなす。指田さんに気負いはない。

*

赤瓦の屋根と真っ白なビーチ。「星砂の島」に仁術を見た。



指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集2/7

【竹富小中学校に〔ロータリー指田文庫〕を贈呈】 12/15

医師が不在となった沖縄県八重山郡の竹富島に単身居を移され、医療による奉仕活動をして下さっている指田勢郎パストガバナーを那覇分区の会長幹事会のメンバーが訪問し、指田先生のご意志に従って、島内唯一の学校である竹富小中学校（児童数：小学生16名、中学生11名）に図書プレゼントを行ないました。

贈呈した図書は百科事典や図鑑、絵本など29冊で、元々は指田先生の診療所の待合室に置いて頂こうとしたものです。

指田先生は「むしろ学校に置いた方が、多くの子供たちに読ませることができる。」とお考えになりましたので、〔ロータリー指田文庫〕と名付けました。12月15日には同校が全校生徒と職員を集めて贈呈式を挙げて下さいました。その席で指田先生から子供たちに向けて「本を読むことの大切さ」のお話もあり、心に染みる訪問になりました。

その後、一行は診療所を訪問し、夜は石垣島に戻って石垣クラブの夜間例会に参加しました。この席には指田先生と竹富小中学校の富村龍男校長、松田文男教頭を石垣クラブが招待して下さいましたので、ゆっくり懇親することができました。参加された沖縄分区の会長幹事の皆さま、佐久本嘉春前ガバナー補佐、準備をされた石垣クラブの宮良榮子会長始め会員・事務局の皆さま、大変にご苦労さまでした。

稲垣純一 D2580 DICO(那覇南RC)





指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集3/7

29-Jan-05

指田文庫

本日、竹富小中学校に「西東京市田無けやきロータリークラブ」の一行9名が訪問しました。目的は、小中学校の図書室内にある『指田文庫』の充実のため、金一封を学校へ贈呈するためでした。

この『指田文庫』とは、昨年島の医療に貢献するため、東京からご夫婦で町立の竹富診療所に赴任された指田勢郎(さしだせいろ)医師(72)に対して、以前から先生と親交があったロータリークラブが診療所の待合室に図書を贈呈したいという申し出があり、それをきっかけにして出来たものです。結局、指田先生は「島の診療所に待ち時間はないから」と言われ、それではということで小中学生の育成に役立てようと仰ったことから、小中学校内に設立されました。最初は沖縄県下のロータリークラブが去年の12月に贈呈を行ったのが最初で、今回は2回目の贈呈式でした。(Y.内盛)



投稿者 takidun : 11:59 PM | コメント (0)

抜粋出典 ;

~ 竹富島ウェブログ ~ January 2005 アーカイブ



指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集4/7

< 5 > 医療の原点は心のつながり

「健康づくりのお手伝いを」

一月下旬。竹富島（竹富町）は曇り空で、冷たい風が吹いていた。

隣の石垣島から週一回の巡回診療にきた医師、田仲みすずさん（44）が、独り暮らしの安里ヒデさん（90）宅を訪れた。

竹富島の町立診療所に赴任したばかりの医師、指田勢郎（さしだせいろ）さん（71）も同行した。



独居の高齢患者の往診を田仲さん（中央）から引き継ぐ指田さん（左）（竹富島一、

微熱の続くヒデさんはベッドから起きあがり、すがるような目で訴えた。

「この島にも新しい先生が来られたから、石垣にいるオジィを連れて帰りたい。病院暮らしはかわいそうやから」

ヒデさんは、石垣島の病院に入院する夫を気遣い、一緒に暮らせる方法を田仲さんに相談した。

「ヒデさんは、オジィのこと大好きやからなー」

田仲さんは、ヒデさんの体をさすり、いたわるしかなかった。

*

沖縄の島々では、病気を抱えた独り暮らしのお年寄りが増えている。医師がいない島は十七もある。

「患者の大半がお年寄りで、高血圧や関節痛が多い。医師がいないから我慢し、症状が悪化するんです」と田仲さんは言う。

田仲さんは大阪・梅田のクリニックに勤務していたが、二〇〇二年四月、石垣島に移住し、離島医療の道に進んだ。

指田さんの着任を受け、田仲さんは四月から隣の黒島で巡回診療を始める。

*

「みなさんの健康づくりのお手伝いをします」

一月十七日、島で開かれたマラソン大会の開会式。約九十人の島民を前に、指田さんが張りのある声を響かせた。

「今年は先生がおられるので、みなさん限界に挑戦しましょう」と島民から冗談も飛び出し、会場は大きな笑い声に包まれた。

指田さんは今、しみじみと感じている。人と人との心のつながりが医療の原点である、と。

（おわり。この連載は那覇支局・鬼束信安、写真部・中島一尊が担当しました）





指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集5/7

21世紀における我々の使命は何か？



ガバナー 指田勢郎

本年2月、アナハイムでの国際協議会に際し、フランク・デブリンRI会長エレクトが、我々ガバナーエレクトたちに対して最初に表記の問いかけをされた。

世界の中には読み書きを知らぬために、男と平等に扱われる女性がいることも知らぬ少女や、障害のために研修の機会に恵まれず世間並みの仕事も与えられぬ青年や、わずかな費用で済む白内障の手術を受けられぬ盲目の老人がいます。

彼らはあなたの目の前にいませんが、あなたこそ、彼らに希望をもたらすことができる人なのです。あなたがクラブメンバーを行動に駆り立てることで、彼らに応えることができるのです。

何よりもまず、積極的に行動をすることです。

我々は新しい世紀のロータリアンとして、新しい推進力、新しい焦点を持って積極的に行動をする時が来たのです。

積極さを忘れ、観念だけに溺れて、何が自分に求められているか？を見ようと考えようとしなない者は20世紀と共に別れを告げ、変化することを恐れず、ガバナー補佐の協力やRI、その委員会(実行グループ)の助けを借り、今まで適切に処理されていなかった問題を解決すべく行動して下さい。

ロータリアンとして、私たちはクラブ、地域社会、そして世界が直面している問題を見過ごすか、無視するか、あるいは逆に行動を起こすかの何れかを選択できますが、我々は「行動」を起こさねばなりません。

まず、我々が直面する問題を認識し、それについての意識を喚起すること。何が求められているか、何が必要かをよく考えてみることで意識を呼び起こすこと。

問題について意識したら取るべき最良の方法について話し合い、討論し、賛同する他のグループを見つけ計画を立て、最終段階である行動を起こすのです。

ロータリアンにとって「意識」と「行動」は不可分のものです。意識しても行動しなければどうにもならず、はっきりと意識しなければ行動もできません。意識と行動の結びついたロータリアンは、世界のニーズを見極め、それに的確に対応することができます。

即ち、『意識を喚起し - 進んで行動を』。これが新しい時代を導くテーマです。我々に求められた「意識と行動」へ前進しましょう。



指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集6/7

変えてはならぬもの、変えるべきもの



ガバナー 指田勢郎

新しき世紀に入って今期のテーマ「行動」の中で、私たちに求められているものについて考えてみると、表題の二つが浮かんできます。

「変えてはならぬもの」とは、ロータリーの原点でしょう。「善意」を基礎にした交友を元に職業の道徳的水準を高め、全ての生活に奉仕の心を持ってあたり、世界の国々を理解し平和に結び付ける努力、即ち『綱領』を生活に取り入れることであるうと思います。

では「変えなければならぬもの」とは何でしょう。まず考えられることは、前記の「ならぬ」ものに対するいいかげんさをなくすことです。ここでロータリアンへの義務であった「出席」に対する考え方を曖昧にする問題や種々の厳しさ(言えばロータリアンらしい)が緩められる方向にあります。これは大きな問題です。

しかし、「変えねばならぬ」問題もいろいろとあります。まず「やった、やった！」と誇らしげに言うなど言われました。しかし、沈黙は金ではありません。ポリオ・プラスの成果は全世界に知っていただき、皆の協力をいただきたい情報として流すべき、努力すべき問題です。“隠徳に修す”では遅いのです。正しい広報を—です。

そして「行動」です。なぜ「行動を」と求められるのでしょうか？それはやはり不足がみられるからです。口だけでなく、身体を、頭を動かす努力こそ求められているのです。

身の丈に合った行動もまた求められるものです。自分たちの根ざす地域への実寸大の奉仕、背伸びでない、持続性を持った社会奉仕、自分たちでできる範囲で堅実で最高のWCS、インターアクトへの支援、青少年交換学生数の決定の問題、できればインターアクト校からの交換学生派遣への道の開放など、新世代の中の横の交流にもっと強力な関係の設立をせねばならぬ等、変えねばならぬ問題が山積しています。

固定観念に閉ざされず「変化」について考えてみたいと思います。



指田 勢郎 竹富島診療所長

記事特集7/7

[トップページ](#) [当院の紹介](#) [院長の紹介](#) [診療科目](#) [診療時間・所在地](#) [頭痛外来](#) [お問い合わせ](#) [サイトマップ](#)

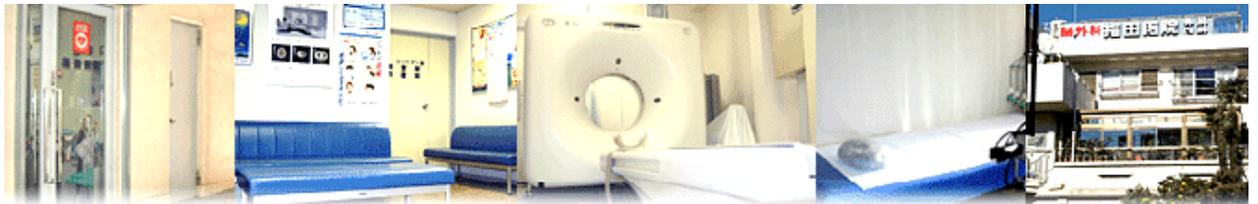
指田医院の紹介

指田医院

Sashida Medical Clinic

西武新宿線「田無駅」北口徒歩1分 Tel042-461-1128

脳神経外科 内科 外科



指田医院の沿革



院長 指田 純

当院は昭和28年12月初代院長指田吾一により開設され、二代目勢郎、三代目院長である純に至る50年以上の間、多摩地区(西東京市)の地域医療を中心に診療に従事しております。現院長の指田純は内科・外科の他に、脳神経外科を専門としています。院長の紹介はこちらへ